



# 志木 ぶらり散歩 マップ

志木の歴史と  
自然を楽しみましょう♪



- 〈凡例〉
- ―― 標高10mライン
  - ―― 古い川や用水のあと
  - ①～⑤ 水塚の位置



野生の生き物に  
エサをやらさないでね

野火止用水跡を  
歩いてみよう  
江戸時代に、多摩川の水を  
この地まで引いた野火止用水。  
ふたがけされていますが、斜面に  
よって今でも歩けますよ！

台地と低地の  
境には鬼味力的  
な坂道が多い  
です

昔の新河岸川は  
こんなに曲がり  
くねっていました

横堤  
川につき出した堤防。  
洪水流の勢いを弱め  
水を一時貯めておく  
役目があります。

ここでろれた水  
は、おもに東京の  
飲み水として  
使われています。

大正3年の  
レンガ橋脚  
東上鉄道が開通  
した大正3年(1914)の  
レンガ造り橋脚が今も  
残っています

富士山が  
きれいに  
見えます  
よー

舟運が盛ん  
な頃は新河岸  
川は  
こんなふうに曲が  
りくねって  
いました

曲がりくねっ  
ていた柳瀬川の  
流れのあとが今  
の志木市と志木市の  
境界線になって  
います

台地と低地の境  
林や湧水があり  
ます

河童伝説が  
残っています

冬になると  
渡り鳥が  
たくさんや  
ってきます

いろいろ木通  
のモニュメント

江戸・昭和・平成  
三代の堤防

江戸時代に、多摩川の水を  
この地まで引いた野火止用水。  
ふたがけされていますが、斜面に  
よって今でも歩けますよ！

野火止用水跡を  
歩いてみよう

昔の新河岸川は  
こんなに曲がり  
くねっていました

いろいろ木通  
のモニュメント

江戸・昭和・平成  
三代の堤防

野火止用水跡を  
歩いてみよう

昔の新河岸川は  
こんなに曲がり  
くねっていました



# 志木ぶらり散歩マップ

## 志木まるごと博物館化計画

舟運で栄えた歴史や江戸時代からの堤防、水塚、そしてアユやカワセミ……  
志木には水にかかわる文化財や自然がいっぱい。  
そんな地域の「お宝」をみんなと一緒に楽しみ、子どもたちに伝えていく。それが「志木まるごと博物館化計画」です。  
このマップ片手に地域のお宝さがし。さあ、ぶらり散歩に出かけましょうか。  
（「志木まるごと博物館 河童のつづら」プロジェクトチーム）

志木ぶらり散歩マップ  
発行 平成21年3月30日  
制作 NPO法人エコシティ志木  
353-0006 埼玉県志木市館1-1-2-108  
電話 048-471-1338(天田)  
協力 (財)埼玉県生態系保護協会志木支部  
〈企画・執筆・写真提供〉天田真 伊藤智明 萩原重裕  
三浦真奈子 毛利将範 山口美智江 山崎光久  
〈イラスト〉毛利将範  
印刷 株式会社サイトウ印刷  
**(財)サイサン環境保全基金助成事業**

志木まるごと博物館 河童のつづら  
http://homepage3.nifty.com/moh/kappa/



### 志木の地形

志木市の地形は武蔵野台地の東の端にあたる台地と柳瀬川沿いの低地、新河岸川と荒川に挟まれた荒川低地に分かれます。  
台地は古多摩川が運んだ土砂の上に火山灰が積もったもので、柳瀬川がこの台地を侵食し低地を造っています。宗岡の低地は荒川が運んだ砂や泥から成り立っています。  
台地と低地の境界にははっきりとした崖線が形成されています。市街化に伴い緑は確実に減少し続け、まとまった樹林は慶應志木高校や、わずかに残った斜面林しかありません。一方、河川の水質は近年の下水道の普及に伴い改善しつつあります。

### 舟運

川越藩主の松平信綱は1644(正保1)年頃に新河岸川と荒川を利用して江戸(浅草)と川越の間で舟運を本格的に興しました。

新河岸川と柳瀬川の合流点付近に引又河岸(明治以後は志木河岸)が開設され2軒の回漕問屋が営業していました。陸上交通(奥州街道)と舟運の交点に当たる志木は多摩地区や甲州方面からも物資が集まり大いに栄えました。その後、新河岸川の改修や1914(大正3)年に開通した東上線の影響により、1931(昭和6)年に舟運は停止されました。  
改修工事で合流点の位置が変わるなどして、現在は河岸場の面影はありませんが回漕問屋の屋敷の一部が市場ふれあいの森となっています。



江戸時代のいろは樋の模型 明治時代に改築された煉瓦大樹

### 水にかかわる志木の歴史

1638(寛永15)	川越東照宮が焼失し、再建資材を新河岸川で運ぶ
1639(寛永16)	松平信綱が川越城主になる
1644~47(正保1~4)頃	新河岸川舟運が始まる
1644~62(正保1~寛文2)頃	佃堤・新田場堤が築堤され惣囲堤が完成する
1655(承応4)	野火止用水が開削される
1656(明暦2)	引又河岸の井下田回漕店が開業
1662(寛文2)	いろは樋が架設される
1895~1900(明治28~33)	旧堤防に現存する4ヵ所の樋門(石造・煉瓦造)が築造される
1903(明治36)	いろは樋が川底を潜る鉄管に改築され大桁が煉瓦造で造られる
1910(明治43)	関東を未曾有の大洪水が襲う
1914(大正3)	東上鉄道の池袋~川越間が開通
1921(大正10)	新河岸川の改修工事が着工
1929(昭和4)	宗岡閘門及び洗堰が築造される
1930(昭和5)	新河岸川改修工事が竣工する
1931(昭和6)	新河岸川舟運が停止される
1965(昭和40)	野火止用水が暗渠の排水路となる
1979(昭和54)	宗岡閘門及び洗堰が解体される
1970年代~現在	新河岸川の第二次改修工事が行われる(志木部分は完成済み)



舟運のレリーフ(いろは橋の欄干)

### 野火止用水

松平信綱は、野火止地域の開墾と平林寺移建のための飲用水の供給を目的に1655(承応4)年、前年に完成したばかりの玉川上水から3割の水を分水し、野火止用水を開削しました。  
最下流の志木では分水路も多く、水車の動力や水田灌漑に利用されました。本流は引又宿の通り(市場通り)の中心を流れ、流末は当初は引又の河岸場付近で新河岸川に落ちていましたが、1662(寛文2)年に、宗岡の地頭岡部氏の家臣・白井武左衛門により、新河岸川を渡るいろは樋が造られ、宗岡の灌漑に利用されるようになりました。いろは樋は1903(明治33)年には川底を通す鉄管に改築されました。  
市場通りの本流は1965(昭和40)年に暗渠の雨水排水路に改変され消滅しましたが、慶應志木高校構内には素掘りの分水路の遺構が残っています。

### 春の野草

寒い冬が過ぎて、暖かい日差しが長くなる。と柳瀬川の河川敷、西原やいろは親水公園の斜面林、宗岡地区の田んぼのあぜ道などにいっせいに春の花が咲きそろいます。  
散歩の途中にふと道端に目をやると、ホトケノザやヒメオドリコソウ、オオイヌノフグリなどの可憐な花が目飛び込んできます。志木には春にだけ咲くカントウタンポポも残っていますし、準絶滅危惧種のイチリンソウを見ることがもできます。  
野草の種類が多いことは、昆虫や他の生物も多いということで、生物の多様性にとってたいへん重要なことです。



### 秋の虫たち

子どもたちが大好きな夏から秋にかけて、西原やいろは親水公園の斜面林、柳瀬川の河原などには多くの昆虫が姿を現します。  
カフトムシやクワガタムシは斜面林のコナラやクスギの樹液に集まり、アキアカネが群れを成して飛び交います。  
夜にはエンマコオロギのコロコロコロ・・・というきれいな鳴き声が聞かれますが、最近ではアオマツムシのリーリーン！という声にかき消されそうです。  
温暖化の影響でしょうか、もともとは関東より暖かい地域に生息していた蝶のツマグロヒョウモンが頻繁に見られるようになりました。温暖化は生態系を変化させますので、その防止に出来ることから取り組みたいと思います。

### 夏の魚たち

志木市を流れる柳瀬川と新河岸川にはおよそ30種類の魚類が生息しています。志木は東京湾に比較的近いため、海と川を行き来する魚類が多いことが一つの特徴となっています。  
季節によってはボラの幼魚が大群をなして泳いでいる姿を、また、清流の魚というイメージの強いアユも見ることができます。アユはもともと川で生まれ、海で育ち、産卵のためにまた川に帰って来る魚です。ウナギは逆に海で生まれ川に遡上します。  
川でよく捕れるテナガエビも、海で生まれ川底を這って志木まで上って来ます。新河岸川や柳瀬川にダムや堰堤がないからこそ、海と川を自由に行き来し暮らしているのです。



## 水との知恵比べ 堤防

荒川と新河岸川に挟まれた宗岡地区は二つの河川による頻繁な洪水を被ってきました。  
そこで360年程前の江戸時代に、荒川と新河岸川に沿う堤防に加え、上流側の南畑(富士見市)との境に佃堤を、下流側の内間木(朝霞市)との境には荒川合流点からの逆流を防ぐための新田場堤を築き、村全体を堤防で囲む惣囲堤(輪中堤)を造りました。  
当時の堤防は現在と比べれば低く、完全に洪水を防止するものではありませんでした。洪水の際は水塚や舟で避難することを前提としていたのです。  
しかし、1910(明治43)年の大洪水を契機に1921(大正10)年から蛇行した川を真っ直ぐにし、川に沿って新しい堤防を築く改修工事を行い、1930(昭和5)年に完成しました。  
その後の都市化に伴いこの堤防でも洪水を抑えられなくなり、近年再度の改修が行われ、河道の拡幅・堤防のかさ上げが行われました。



### 樋管

宗岡の惣囲堤には平常時に堤内(村側)の水を堤外(川側)に排水し、洪水時には川の水の浸入を阻むための樋管が築かれていました。  
江戸時代から木造で造られてきたものを明治時代後期に改築したもの内、石造のものが1基(籠島門樋)、煉瓦造のものが3基(大小合併門樋・北美塚樋・新田塚樋)現存しています。

### 水塚

惣囲堤に囲まれた宗岡村では宅地は水田から一段高く盛土され、さらに1m位盛土された水塚を築き、その上に蔵を建て貴重品の保管場所や洪水時の避難場所として使いました。多くの家では避難用の舟も備えていました。  
江戸時代から造られ、現存のものは明治期の築造が多くなっていますが、今でも50基ほどが残っています。



水塚のある風景